

# 北村透谷研究

河野ゆかり

## 目次

はじめに

本論

一、親愛なる貴嬢よ

二、「厭世詩家と女性」

三、永遠の女性

四、透谷死後のミナ

五、意志の人

おわりに

参考文献

## はじめに

私が北村透谷に興味をもちはじめたのは「厭世詩家と女性」を読んだからである。

恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、

で始まるこの評論文の活気あふれる調子が快かったのである。透谷に関心を抱き、彼に関する本を読んでいくうちに、私はますます透谷が好きになった。

許嫁のいる石坂ミナに恋愛し、その恋愛の勝利者となった透谷。ミナは透谷より三歳年上だが、ミッションスクールに通い、高い教養を身につけたすばらしい女性だった。

熱烈な恋愛を経て結ばれた二人なのである。

ところが結婚生活六年目の明治二十七年（一八九四）五月十六日、透谷は自ら生命を絶ち、二十五年四か月の生涯を終えてしまう。——愛する妻、幼い娘を遺して、なぜ自殺してしまったのだろうか。

透谷の句に、

折れたまゝさいて見せたるゆりの花

というのがある。私は透谷が弱い人間でも卑怯な人間でもなかったと信じた。透谷は折れたまま、どう咲こうとしたのか、私は追究してみたいと思う。

二十五年の生涯を完全燃焼させて逝った透谷——彼には優れた作品が数多くある。その中で、私にとって最も身近なテーマでもある

「恋愛」を、「厭世詩家と女性」を中心に考えてみたい。

この評論は、透谷の批評文の中でもっともすぐれたものの一つであるばかりでなく、爾來、今日にいたるまでの無数の恋愛論の中で群を抜いているものである。

(桶谷秀昭著 『北村透谷』)

近代日本詩人選 1

透谷の魅力を私なりに、全力を尽くしてまとめてみようと思う。

## 本論

### 一、親愛なる貴嬢よ

透谷とミナとの出会いは明治十八年(一八八五)の夏で、ミナが横浜の共立女学校寄宿舎から帰省していた時である。この時のことを神崎清氏はミナ夫人からの聞き書きで次のように書いておられる。

透谷とは、明治十八年、父石坂昌孝に紹介されて、三多摩の實家(野津田村)ではじめてあった。自由黨の關係で、それまでもときどきあそびにきていたらしいが、私が顔をあわせたのはこのときがはじめてであった。

弟の公歴と一しよに食事をして、私がお給仕をした。髪の毛がながく、女の柄のような白地の着物をきていた。書物の話をしているうち、「それは何頁にある」とすぐに答えるので、頭のいい人だなと思った。私もすこし話相手をした。

その時分、私の家におおぜい壯士のような青年が出入していたが、ゴロツキのように感じがわるいので、あまり口をきかなかった。そうした人たちにくらべてみると、たしかに透谷は、思索型の青年だという印象をうけた。

(『透谷全集』第一卷 附録第一號)

「北村美那子覺書」

ミナは透谷に対して好意を抱いたようである。そしてそれから二年後、横浜共立女学校を卒業したミナは、東京における父昌孝の政治運動の隠れ家(本郷区竜岡町)に帰省し、そこで透谷と再び会う。二人の間には恋愛感情が芽生え、急激に進展していった。

### 拝啓

親愛なる貴嬢よ、生は筆の虫なりと云はれまほしき一奇癖の少年なり、(中略)

生は貴嬢の風采を慕ふ事いと永かりし、而して親友たるの時は斯の如くそれ短し、生は貴嬢の親友として世を送るを得ば、他に何の求むべき幸福あらんやと曾つて思考したりき、計らざりき、此得難き幸福を破つて遠く貴嬢に別るゝの日に迫らんとは、嗚呼、天も亦た無情なる乎、今や貴嬢に別れて遠く去らんとするに際し、聊か貴嬢に懇願する所あり、

(『石坂ミナ宛書簡』)

一八八七年八月十八日)

透谷の苦惱がはじまる。

透谷にはこの恋愛の進展を躊躇する気持ちがあった。相手は三多摩自由党の名士の令嬢である。しかもミナは許嫁のある身。ミナの許嫁、平野友輔は東京大学を卒業した医者で、ミナの父昌孝と共に早くから自由党で活躍したという将来有望の人物であった。ミナより八歳年上で、ミナの両親は、さぞ似合いの夫婦になるだろうと、頼もしく思っていたにちがいない。

透谷は明治二十年、八月十六日から二十一日頃にかけてまったく「慘憺たる一週間」を送った。ミナとの交際断絶を決心するのである。透谷は自分に十分な経済能力がないことやミナとの身分ちがいの恋の前途に失意落胆したのでらう。相思相愛であるにもかかわらず「身を砂漠に抛つての覚悟」で断念しようとした透谷の気持ちを考えると、胸がしめつけられる。「余は凡夫の一疾病者なり、嬢は真神の庭に生長する葡萄〔葡萄カ〕の美果なり」「嬢は榮譽ある一婦人なり、余は敗余の一兵卒のみ」と透谷はその手記の中で語っている。透谷の敗北意識は、自由民権運動からの離脱、商業の失敗の上に加えてミナに対する純粋な恋愛感情からも起こったものではないかと私は思う。

僕が、君の骨相上に見出したる、(過言は失敬)僕の、最も好む、性質にて、若し、其れが違つたら、もふいけな、はだしな、飛び出すばかりさ、

第一、優美を愛する心、

第二、理想を好みたまふ事、

第三、消極的を以て社界に盡さんと思ひ玉ふ事、

右は、他の俗論者に反して、獨り君に、見出したる、尊敬すべき性質なりかし、

(「夢中の詩人」)

「夢中の詩人」はミナ宛書簡の草稿らしく、前記した一八八七年八月十八日のミナ宛書簡や「(北村門太郎の)一生中最も慘憺たる一週間」と同時期に執筆されたものと考えられている。

ミナを敬愛する気持ちは、「石坂嬢は教育も高く、智識も持し、加之其父より受けたる榮譽を荷へり、(中略)嗚呼嬢は真の神の教を以て衆生を救はんとする有要の一貴女なり」と、父快藏宛書簡の中で語っているところからも理解できる。ミナは熱心なクリスチャンであった。透谷は、ミナのキリスト教会における指導者としての能力を認め、その活動の妨げになつてはいけなさと考えたのである。

嗚呼嬢をして其目的を達せしむるには、生と結婚なぞと忌はしき志望を脱却せしむ可し、是れ生が断然此交際を破らんと計りし所以なり、此恋情は則ち石坂嬢が世を益せんが為めの犠牲なり、

(「父快藏宛書簡」)

一八八七年八月下旬)

この透谷の苦しみに、ミナは知らん顔をしていたわけではなかった。透谷への愛情は「此社会は尊敬す可き社会にあらず、財産を持ち名譽を負ふ人の如きは皆是れ土芥に比しき者なり、名譽もなく財

産もなき壮快の男子こそ我夫と定む可き者なり」と、透谷の面前で語つたらしいこの言葉から理解できる。ミナにそう告白された透谷の心はどんなに慰められたことだろう。しかし、透谷は自分に対するミナの愛情を確信すればするほど悩んだのではないだろうか。

斷然、もはや訪ひ行かぬ可しと思ひ定め、せめてもの事にモウ一度ユツクリ話しをして見たいと云ふテムテイションに誘はれて、貴嬢を訪ひ行きしは厚生館の前々日の事にてありけり、此夜は最も生を苦しめたる記憶す可き時なりけり、生は既に貴嬢の生をラブする事を覺りしも、此夜ほど貴嬢の舉動の余を引くこと甚しきはなかりし、生は此夜を以て一生のいとまごひをなさんと心がまへしてければ、貴嬢が生をラブする舉動ある毎に、最も感覺の鋭どき生の胸部にハッシと立つ矢の痛みはいとゞ堪へ難く、七転八倒の苦しみなりし、

〔石坂ミナ宛書簡〕

一八八七年九月三日

透谷は一八八七年八月十六日の夜、ミナを訪ね「貴嬢の活潑に生話し勇猛に世に尽さん事を希ふ」と述べ、「人生の正路を取つて進む可き事」との誓言を約してミナとの交際を断つ決心をした。

しかし十九日には前記したように、ミナを再訪して七転八倒の苦しみ。透谷はこの日、ミナの母ヤマに苦情を言われ、「断行せしむ可き好機会」とばかり、ミナと絶交したのだった。この「断行の功果」があったと感じたのはその数日間もしくは一晩だけで、横浜で商業の計画に失敗した透谷は帰京し、再びミナに手紙を書いたので

あった。

彼れは何時頃、如何なる人と結婚するやらん、彼れと結婚する人は果して我をも親しみて、折々は彼を訪ひ行き對話するを得せしむ可きや、否々、我國の教風はミッセスを尋ねて行く朋友を禁ぜり、左すれば彼れが結婚すると同時に、我は最早彼を見る事能はず、アナ悲しやな、如何せば可ならん、

（前出「石坂ミナ宛書簡」）

「夜も安く眠る事なく、晝も愉快に遊び得ず、一二週間を経る内に心神亂れて、不幸の極點とも覺しき地獄の境界に陥り」、慘憺たる苦惱を味わつた透谷だが、やがて、

吾等は世に恐るべき敵なきラブの堅城を築きたり、道義の眞理にも背かず、世間の俗風をも凌ぎ居る者なり、君よ請ふ生をラブせよ、生も此身のあらん限りは君をラブす可し、

〔石坂ミナ宛書簡〕

一八八七年九月四日

という決意を示すにいたる。透谷のこうした手紙に対するミナの返事が一通も見当たらないのが残念であるが、誰に恥じることもない二人の「欧州風の交際」は結婚へと発展していったのである。

ここで特に記しておきたいのは、透谷に「惚れた相手は自分のものにしておきたい」という男性にありがちな女性に対する所有欲・独占欲が文面には感じられないことである。どんなに固く断念を決

意してもミナと別れられなかったのは、ミナが他の男性と結婚するのが腹立たしいからではなく、結婚してミセスになると会って話をするのができなくなる、それが悲しいと、とつおいつたというのである。ミナの弟公歴を介しての友情・同志感情から展開した恋愛の自然である。実際透谷はミナと対談するのが非常に楽しかったらしく、時にはそれが数時間に及び、徹夜で話し込んだこともあるほどである。

二人の結婚はミナの母親をはじめとして周囲に反対されるが、それで別れるような二人ではなかった。二人はその反対を押し切って結婚するのである。それまでに、

共立女学校内のミナにあてた石坂昌孝の書簡で一八八八年六月一日附けのものに、「北門子より時々長々敷手紙参り家屋改造の事懇切に申越候」とある。北門子は北村門太郎、家屋改造の件は結婚談に関していると解せられる。これによって見ると竜岡町以来十カ月後のそのころには、昌孝は二人の結婚にすでに承諾を与えていたわけである。石坂家が最後まで承諾しなかったとか、二人だけで教会の門へ走ったとかいう従来の説はくつがえされる。

(勝本清一郎著『近代文学ノート2』)

〔北村透谷の生涯〕

という経過があった。

明治二十一年(一八八八)十一月三日、数寄屋橋教会で挙式し、二人は弥左衛門町宅で透谷の家族と同居の新生活に入った。舟橋聖一

氏が『北村透谷』で「彌左衛門町の煙草屋の二階」を「かりそめの式場」としておられるのは「序」で断られているように、氏の「作家としての作用」によるものである。

## 二、「厭世詩家と女性」

透谷の「厭世詩家と女性」が『女学雑誌』に掲載されたのは明治二十五年(一八九二)の二月だった。執筆した動機については、ミナとの結婚生活に幻滅、絶望したためと思われているが、「厭世詩家と女性」を虚心に読んだ私の印象は少し違っている。

若い夫婦は惨として相對するような日を送った。こういう苦い経験は夢のような恋の時代に想像の出来なかったことである。一方へ向いては艱難と戦わねばならぬ。一方へ向いては鶴子を養わねばならぬ。二人は黙って、考えて、顔も見合せずに食うことも有った。

(島崎藤村『春』二十四章)

と、幼な子をかかえた二人の苦悩が描かれている。また、勝本清一郎氏も

この「厭世詩家と女性」は恋愛のマニフェストと誤認されているが、その真の内容はむしろ恋愛および結婚生活の葬送曲である。特に結婚生活への絶望感が一篇を貫いている。

(前出『近代文学ノート2』)

〔透谷の宗教思想〕

という。それらは「厭世詩家と女性」の次のような箇所から読み取れるのだと思う。

怪しきかな、恋愛の厭世家を眩せしむるの容易なるが如くに、婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なり。(中略)多くの希望を以て、多くの想像を以て入りたる婚姻の結合は、彼等をして敵地に踏入れしめたるが如きのみ。彼等が明鏡の裡に我が真影の写るを見て、益々厭世の度を高うすべきも、婚姻の欲楽は彼等を誠信と楽天に導くには力足らぬなり。

彼等は人世を厭離するの思想こそあれ、人世に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社界を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不満を多からしむる者、是を以てなり。かかるが故に始に過重なる希望を以て入りたる婚姻は、後に比較的の失望を招かしめ、惨として夫婦相対するが如き事起るなり。

透谷ミナの結婚生活は金銭的には決して豊かなものではなかったようだ。透谷の日記は現在一部分が「透谷子慢録摘集」として伝わっているだけなので、残念ながら残っている資料から当時の生活状態を想像するほかない。

明治二十三年(一八九〇)結婚三年目の、九月廿四日の記述に「米九升七合なり」とある。これについて、舟橋氏は『北村透谷』の中で、

或る日の透谷の日記に、

「米九升七合なり」

と、ぶしつけに書いた個所がある。恐らく、米價が昂騰して、圓に九升七合にまでなつたのを慨嘆した一句であらう。今日から考へると、比較にも何にもならぬが、當時の九升七合は、透谷の家計には、よほど、つよく響いたものに違ひない。(第六章 一)

と述べて、さらに櫻井明石氏の回顧談を引用しておられる。

「透谷子は詩人であり、時に飄風な行動のあつた人である。故に日常米鹽の事などは夫人任せで顧みなかつたのであらうと思ふと、なかなかさうばかりでは無かつたらしい。一つには夫人が地方豪家の生れで、結婚の當初は、家事經濟には恐らく不馴れであつたため、子自ら出納の事に當つたのが、度度有つたらうと思はれる。(中略)多分、此頃の事で有つたかと思はれるが、子の母が、「お米は高くなつても、圓に一斗までであつて欲しい」といつたのを覚えてゐる。精米が、一圓に一斗以内に入つてから、我々の生活が次第に苦しくなつて來たのである。「米九升七合なり」の一句は、そこに米があがつて困るなア、と眉に一きは深く、八の字を寄せて、つぶやく透谷子をあらはしてゐて、予は笑止々々と、思はず微笑を洩らしたのである。

ミナは家計のやりくりの不馴れであつたと想像されている。ところが、勝本氏の編まれた年譜によると、

明治二十六年(一八九三)、九月、

ミナは夫の生活を助けるため、長泉寺で附近の娘たちに裁

縫を教えはじめた。「十人ぐらゐも弟子があつたらうか。自分の娘のちかも習つて、ちかしく往き來していた」(前羽村前川二八八番地・椎野國太野、八十二歳、一九三九年八月廿四日直話。)

〔透谷全集〕第三卷)

とあり、『春』にも、

新婚の当時に比べると、生活は一層困難に成つて來ている。しかし操は飽くまでも夫を助けて働こうと思つた。「そうだ」と彼女は歩きながら考へた。例のこと——近所の娘を集める、自分が針仕事でも教える、それで一人下女を頼もう、どうして今の有様で子供の教育などが出来るものではない。

(同 二十二章)

彼女に言わせると、時節の來るまで貧乏すると思へば差支ない話で、食えないと言ふなら共働じこがせぎもしよう(現に、操は近所の娘を集めて、寺の本堂で裁縫や手習などを教へている)。

(同 四十三章)

と描かれてゐる。これらを参照すると、ミナはお嬢さん育ちでやりくり上手ではなかつたとばかりはいえないのではないだろうか。當時の女性としては私はミナの思ひつきや行動力はすばらしいと思ふ。

明治二十六年(一八九三)といへば、長女英子は生後一年三カ

月、かたときも目のはなせない時期である。夫を助けるためとはいへ、幼な子を抱えてミナは大変だつたと思ふ。

ミナがこのような共稼ぎの決心をした背景に、透谷が伝道旅行に出て、家をおよそ一カ月近くも空けたことがあげられるのではないかと思ふ。

明治二十六年八月下旬、透谷は花巻でミナからの手紙を受け取つた。透谷はミナの手紙を読み、激して返事を書き大急ぎで帰京した。透谷が書いた返事から察して、ミナは家計のやりくりで頭を悩ませ、家を空けて一カ月になるというのになかなか帰つてきてくれない夫を責めたようである。

拜啓、貴書を得て忙〔茫〕然たる事久し。何の意にて書かれしや、一切解らず。われ御身に対して敬礼を欠けりと云ひ、眞の愛を持たずと云ひ、いろ／＼の事、前代希聞の大叱言。さても夫たるは斯程に難きものとは今知れり。(中略)

わが妻となりし君にあらざるや、何ぞ遅々として大道を看破するのおそき。(中略)

且つ又た当世は詩人を出すに早やきなり、詩人自ら出でんとすればこそ苦痛更に大なるなり、乞児となり餓拳となりても君はなほ詩人の妻となる心ありや否。(中略)

君、口に貧を厭はずと言ふ、然れどもこれ、わが分に応じたる貧ならば耐ゆべしと云ふにはあらずや、われ女学生にして且つ門地ありと言はゞ、如何なるところを君の分とせん。蓋し詩人を助くるの心なきものなるや。

夫貧すれば初めて妻の助ありときくものを、われは貧して初めて妻の怨言不足を聞く、(中略)捨てんと欲せば、捨てよ、言ひ甲斐なく大事業の中途に彷徨するこのわれを。(中略)

御身に如何程の愛ありて、斯くわれを責むるぞ。われをして中道にわが業を停めしめんとの愛にてか。詩人偉人の妻は他と異れり、われもまた他の夫と異なるを知る。(中略)

記憶せよ、きみ今は病苦の人の妻なるを。

と言いながらも、透谷は大急ぎで帰京するのである。ミナの言葉に怒りをぶちまけながらも、透谷は「お前が何とかうまくやりくりしておいてくれ」と放ってはおかなかった。こういうところにむしろ透谷の絶望よりも、ミナへの訴えと愛情が感じられはしないか。

透谷の帰京後まもなく、年譜によると明治二十六年八月三十一日、長泉寺に転居し、この境内でミナは娘達に針仕事などを教へはじめた。

ところで、以上の「詩人の妻たるものは云々」という透谷のことばや、結婚生活が経済的に苦しく、そこからまた「惨として相對する」ようなことがあったということから、「透谷はミナとの結婚生活に絶望した」とするのは早急すぎはしないだろうか。結婚前の透谷ミナは、自分達の結婚生活が経済的にも社会的にも決して楽観的に考えられないことぐらいは覚悟していたと思われる。勝本氏も結婚生活への絶望感を指摘しておられるのだが、右に見て来たところからも断定はしばらく留保しておきたい。

透谷は「処女の純潔を論ず」で、

夫れ高尚なる恋愛は、其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔チユウケツより恋愛に進む時に至道に叶へる順序あり、然れども始めより純潔なきの恋愛は、飄渺として浪に浮かるゝ肉愛なり、何の価値カチなく、何の美観なし。

と、日本の肉愛的恋愛を指摘批判している。透谷は肉体にのみ重きを置く恋愛を鋭く批判し、真の恋愛のあり方を説いている。透谷は「当世文学の潮ウシ摸モ様」でも、世の文学者が真の恋愛を描ききつていないと嘆き、「粹を論じて『伽羅枕』に及ぶ」や「『伽羅枕』及び『新葉未集』」などにおいては、粹と恋愛の相連を論じ、真の恋愛と粹とはっきり区別しようとした。

では、透谷は肉愛なるものを完全に否定したのであろうか、結論から先に言えば、勝本氏が、

しかし透谷は人間の願望を、イエスや再洗礼派やクエーカーや晩年のトルストイのように、神の国の原理、清純な側からだけ捉えたのではない。暗い衝動としての動物的欲望の側からもそれを捉えて、問題を二元的に展開して、往きつ戻りつした。

(前出『近代文学ノート2』)

『透谷文学の生命』

とも述べておられるように、透谷は肉愛と恋愛との区別はしたが、「暗い衝動としての動物的欲望」である肉愛そのものの存在をまったく否定しているわけではないと思われる。

透谷は実際「実に数多の婦人を苦しめ」た経験をもっている。そ



れは透谷にとって苦い思い出には違いないが、ミナに会おうまで、透谷はそのことに對して罪悪感など抱いていなかったのではないだろうか。早熟だった透谷少年は「数多の婦人を苦しめて自ら以て快しとしたる者なり」と彼自身語っていることからわかるように、世間の青年と同じように遊廊に出入りしていたのだった。

透谷は十六歳の頃は八王子に郡書記をして居りましたが、何でも金さへ下がれば遊女屋へ持つて行つて、なくなるまで騒ぐと云ふ風であつたさうです。それより先、前申した大矢さんと二人で禁酒の約束をしたのださうですが、大矢さんが久しぶりで八王子へ訪ねて行つて見ると、思ひがけもなく遊女の着物何かを着て透谷が迎ひに出たとかで、さん／＼大矢さんに責めつけられたさうです。

『透谷全集』第三卷 附録第三號

『春』と透谷

透谷は己れ自らの体験として魂よりも先に肉体を知つてしまつたのである。しかし、その後ミナを知るにいたつて、遊廓的好色の恋愛は眞の恋愛ではないことが、はつきりと自覚され、だからこそ自分の過去のおやまりをミナにも隠さず言えたのだらう。

生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは、人間の價格を禽獸の位地に遷す者なり。春心の勃発すると同時に戀愛を生ずると言ふは、古來、似非小説家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮小したる毒弊

なり、恋愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と実世界との争戦より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは、即ち恋愛なり。

(前出「厭世詩家と女性」)

という、肉愛否定とも見られる恋愛觀が、上記のような透谷の好色体験への反省から生まれたものであることは、いうまでもない。しかし、私は、上記の文中における「のみ」という限定の助詞に注目したい。これを見落とすと、透谷の恋愛觀は、完全に肉情を否定した、観念的なものとされてしまふのではないか。このことはまた、

「恋愛は一見して卑陋暗黒なるが如くに其実性は卑陋暗黒なるものにあらず。」(中略)

「恋愛は透明にして美の眞を貫ぬく。」

(「全上」)

と、恋愛の、いわゆる「盲目性」「暗黒性」を強く否定しておきながら、一方では、

恋愛の性は元と白晝の如くなり得る者にあらず、(中略)恋愛が盲目なればこそ、悲哀もあるなれ、(中略)恋愛が人を盲目にし、人を痴愚にし、人を燥狂にし、人を迷亂さすればこそ、古今の名作あるなれ。

(「粹を論じて『伽羅枕』に及ぶ」)

と、むしろ盲目性、暗黒性を強調する点とも相通するものだと思わ

れる。

プラトニック・ラブという性と性欲の伴わない清く美しい精神的恋愛と思いがちである。プラトンは、現実世界に対する理想世界として「イデアの世界」を考えた。その著書『饗宴』で、ソクラテスをはじめ、当時のアテナイにいた実在の人物を登場させて、イデアの世界へ向かう「エロスとは何か」を語らせている。ソクラテスの口をかりて語っている部分を、矢内原伊作氏がまとめておられるので引用することにする。

ソクラテスの論法はこうである。エロスは何ものかへの欲求であるから、その何ものかを欠いているものである。かと言って醜でもなく悪でもない。醜と美、悪と善の中間者である。神は善美だから、エロスは神ではない。いわば人間と神との中間者であり、人間を美にして善なる理想へと推進する力である。

(中略) エロスとは美にして善なるものの永久の所有に向うものである。(中略) このようなエロスに従う者はいかに行動すべきか。肉体的にも精神的にも、美しいものの中に生産すべきである。生産と生殖によって、エロスは美しいものを不死ならしめるのである。(中略) もろもろのエロスが向う窮極の目標は、美の本体、善の本体、美と善の永久不変の絶対的本質ならわちイデアの認識である。

『歩きながら考へる』「十一面観音の旅——あるいはエロス

に(二二二)

プラトニック・ラブは透谷の理想としたところである。のちに「内部生命論」において、「宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感應」を説いたプラトンの理想主義者透谷である。恋愛を論じて、プラトンのイデア追求のエロスと同意義ともいへべき「想世界の牙城」・「恋愛」を説いた透谷を、プラトニック・ラブの日本における最初の唱道者と見ることは至当であろう。ただし、それは、右に矢内原氏が『饗宴』を要約して明示して下さったような意味でのプラトニック・ラブであって、「美しい肉体に生殖する」エロスを否定するものではないこと、肉体的エロスもついに善美の本体イデアに向かうものであるとするのが、透谷の理想主義恋愛観だと思ふ。

先に、私が、透谷の結婚に対する絶望感についても、絶望したという断定を保留したいと言ったのも、透谷を、右のようなプラトンの理想主義者と考へたいからである。挫折があり、失敗があり、さらに落胆があり、失望はあるとしても、恋愛の牙城にある想世界の敗北者が、その牙城によって再び実世界へ乗出す希望を持つように、理想主義者透谷には、失望はあっても絶望はないと考へるからである。「折れたまゝ咲いて見せたるゆりの花」透谷の恋愛・結婚のいづれもまた、折れたまゝ咲いたゆりではなかったか。

「処女の純潔を論ず」が「女学雑誌」に掲載されたのは明治二十五年十月。巻頭の一節は当時の青年に愛唱されたという。

天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは処女の純潔なるかな。

つづいて透谷は滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」の伏姫と八房の関係を論じた。

この幻界に、かの妖犬に伴はれて入りぬる伏姫はいかに。

山峽に伴はるゝ時の決心は、身を妖犬に許せしなり。許せしとは雖ども、肉膚を許せしにはあらず、誠心を許せしなり。

(中略) 誠心は非類にも許すべしとすれど、肉膚は堅く純潔を守りて畜生に許さず。一方には穢土穢物を嫌ひたまはざる仏の慈悲に似たるものあり、他方には餓鬼畜生の慾情と戦へる靈妙なる人類としての純潔あり。

人畜の道を超えた伏姫の処女としての誠心が八房の欲情凡悩をも成仏させたというのである。透谷は伏姫の誠心が「遙かに人間を離れて菩薩の心」へと解脱していったと述べている。「菩薩の心」とは、「一方には穢土穢物を嫌ひたまはざる仏の慈悲」なのである。

八房が伏姫によって成仏できたように、透谷はミナと恋愛したことによって「靈妙なる人類としての純潔」を知って、自らの「欲情」から救われると共に「穢土穢物」の「実世界に乗入る慾望を惹起」されたのである。ミナは透谷にとって「女神」であり「アンゼル(aengel)」であり、「伏姫」だったのである。透谷の恋愛観にはそのような実感がこもっていると私には思えるのである。

もし黄金、瑠璃、真珠を尊としとせば、処女の純潔は人界に於ける黄金、瑠璃、真珠なり。(中略) 噫人生を厭悪するも厭悪せざるも、誰か処女の純潔に遭ふて欣榮せざるものあらむ。

然れども我はわが文学の為に苦しむこと久し。悲しくも我が文学の祖先は、処女の純潔を尊とむことを知らず。徳川氏時代の戯作家は言へば更なり、古への歌人も、また彼の靈妙なる厭世思想家等も、遂に処女の純潔を尊むに至らず、千載の孤客をして批評の筆硯に対して先づ血涙一滴たらしむ、嗚呼、処女の純潔に対して端然として襟を正する作家、遂に我が文界に望むべからざるか。

(「処女の純潔を論ず」)

日本の文学が処女の純潔や恋愛を尊ぼうとしないことに透谷は失望し、それを嘆いているのであるが、女性を「処女」か「非処女」とかという視点でだけ見ようとしたのではないことを一言付け加えておきたい。

### 三、永遠の女性

「蓬萊曲」に登場する露姫は主人公柳田素雄の恋妻で、ミナがモデルだといわれている。素雄は世を捨て、飄々と旅をしている途中、蓬萊が原で露姫そっくりの仙姫に出会う。その時から急激に素雄の露姫への慕情がつのりはじめる。素雄は仙姫と露姫の区別がつかなくなってしまう、とうとう仙姫に対して、

嘯、嘯、待てや露姫!

ひとことだにも、われを思ふと言はずして、  
復た新らしき物思ひせよとや。

ひとことをのこせ、われを愛すと、  
愛せずや恋せずや、嘯、嘯、露姫！

と、痛々しいほどとり乱してしまふのである。

素雄は露姫の内に救いを求めて、姫のところに行けるのなら、地獄も極楽も関係ないと思つてゐる。素雄は「死」が恐ろしくないのである。

蓬萊山の大魔王の怒りで、素雄は最後、眼が見えなくなり、腕が動かなくなり、脚が立てなくなつてとうとう死んでしまふ。

「蓬萊曲」ではほとんど素雄の一人舞台で、素雄は不幸にも愛しい露姫にめぐり会うことができず、救われないまま死んでしまふのである。

仙姫は素雄に対して始終つれない態度だつた。私がそう感じたのはあるいは仙姫が露姫の化身ではないかと思つたからかもしれない。しかし、「蓬萊曲別篇」を読んで、そう考へてもかまわないと思つた。

「蓬萊曲別篇」では、素雄が彼岸に達するところまでが描かれてゐる。その水先案内するのが露姫である。ここでようやく「救いの女神」として登場する。

露姫は素雄の琵琶をかき鳴らして、眠つてゐる素雄を起こそうとする。

露、まだ狂ふよ、いで最一度、

(五度琵琶を鳴す)

素、それなるは如何、棹の形せるものは陰府の鎮なるか、わが苦痛の時に来れるか、それは如何、優しき鬼なるかな、その

優しき顔以てわれをいかにする。

露、わなみは鬼にあらず、露姫よ、露姫よ

きみが妻なるよ！

(六度琵琶を鳴す)

(素雄かつばと起ちて)

素、わが露姫とや？その音はわが琵琶ならずや、わが精神ならずや。

(四方を顧みて)

こゝはあやしき霞の中、いかにいかにわが露姫のこゝに居るとは。

「慈航の湖」でとうとう素雄は愛しい露姫にめぐり会えた。ハッピー・エンドとはいえないかもしれないが、素雄が無事に彼岸までたどりつけそうに安心した。厭世の旅に出ていた素雄にとっては「露姫」と「死」が何よりも救いになつてゐるようである。

ただ、私が疑問に思ふのは露姫の化身である仙姫と、露姫のつた態度の違いである。なぜ仙姫はあもつれなく、逆に露姫はあも優しかつたのか。素雄のおかれてゐる状況の違いによるものだろうか。それとも女性の二面性を示すのもあろうか。これは今後の課題にしておきたいと思ふが、今ふと思ひ合わされるのは次のことである。透谷は「厭世詩家と女性」で、

女性は感情の動物なれば、愛するよりも、愛せらるゝが故に愛すること多きなり、愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ、正当の地位なれ。

と、女性の受身的な愛を指摘している。つづいて、男性に葛藤のようになりまわりつく女性、男性の一举一動や愛情によって左右される女性の現状を述べ、心を痛めている。しかし決して「だから女性はつまらない」と軽蔑しているのでもなければ女性に失望しているのでもない。むしろ透谷は、恋愛の時とは異って結婚後の女性が特に陥りやすい状態を述べて、夫たる厭世詩人に警告しているのである。と同時に透谷自身も深く反省しているのだと思う。透谷は女性に同情し、何とか救えないものだろうかと思案に考えているのである。

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ねての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ。

透谷は、理想主義詩人たる自分と現実とのほざまで苦しむミナの姿をまのあたりにして、苦しんだのである。

婚姻によりて実世界に擠せられたるが為にわが理想の小天地は益狭窄なるが如きを覚えて、最初には理想の牙城として恋愛したる者が、後には忌はしき愛縛となりて我身を制抑するが如く感ずるなり。

全く厭世詩人のわがままでしかないように思えるが、妻の愛情を

「愛縛」と感じてもしつ方のない状態だったのかもしれない。

しかし透谷にとってミナの苦しみは自分の苦しみでもあった。

理想へ上昇しようとする厭世詩人を地上へひきずりおとそうとする現実。貧しく苦しい日常生活、ミナの姿。透谷はミナに「ハウス・キーパー」ではなく「詩人の妻」としてほしいのである。当時の女性としては最高の教育を修めたミナにはキリスト教会の指導者としての才能もあったはずである。一方では自分の理想世界が縮められて苦しみ、他方ではどうにかしてミナを現在の状態から救おうと苦しみ、しかしどうにもならない状況があったのである。それが「うたてけれ」という嘆きの言葉となって発せられたのである。

刀折れ箭尽きた敗北は認めるとしても、絶望はしないで、なおも現実と戦い理想を追求しようとした透谷ではなかっただろうか。透谷が現実と戦うことの苦しみから逃れるために自殺したとは私には考えられないのである。「絶望」と「死」とを直ちに結びつけるような短絡な思考は避けたいと思う。

ミナに込められた透谷の思いを考え、さらに透谷の思いを受けてその後を生きたと思われる透谷死後のミナを追求することによって真の理想主義者たる透谷像をもっとはっきりさせることはできないかと思う。

#### 四、透谷死後のミナ

ミナはその生涯のおよそ三分の二を未亡人として過ごした。透谷が死んだ時、わずか一歳と十一カ月の幼い娘をかかえてミナは途方にくれたにちがいない。後のミナの日記によると、透谷の両親から「他に嫁する様子供へ引受た。わるい様にハ為ぬから安心せよ」と

言われたそうである。(小沢勝美著『北村透谷 原像と水脈』「北村ミナの一生」)けれどもミナは子供のために一生未亡人を押し通そうと決心した。『女の世界』「誘惑と戦つて廿餘年の獨身生活」というのも、透谷がミナの心いつまでも消えずに生き続けていたからではないだろうか。そしてしばらくの間、ミナは宣教師として伝道事業に携わる。ミナがクリスチャンになったのはミッシェンスクール在学中のことであった。

明治三十二年(一八九九)六月、ミナは、ウッドウォルス夫人の姉ミス・ペンロッドの縁故で、帰国するウッドウォルス夫婦に伴われて渡米する。娘英子は透谷の父母のもとに預けての單身渡米だった。可愛い娘のために再婚を断念したミナが、当時六歳の英子を残してである。どんなにつらかったことだろう。「子供を實家に預けての歸りに、汽車の中で三度も卒倒した位でした。」(前出「誘惑と戦つて廿餘年の獨身生活」とミナ自身語っている。

ミナが單身渡米を決心したことについて小沢氏は「透谷への復讐ないし彼女の新生に自己をかけた△近代Vのな決断という評価」も「一人の宣教師への思慕がそうさせたという臆測」も当ててはいないとして、「父親を失なった一子英子を北村家のあととりとして立派に育てなければならぬという使命感」だと述べて、近代的な「天」から与えられたわが「家」としての「北村家」のあととり「どちら側の両親にも頼らず、自分の経済的な自立によって」「なしとげようとした点で」「まさに近代的といえる。」と解釈しておられる。(前出「北村美那の一生」)ミナにしてみれば、両親の反対を押し切つて結婚したのだからという意地もあったかもしれない。

渡米したミナは、ミナ自筆の履歴書によると、はじめ「インヂヤ

ナ州ユニオンカレッジ」に学び、次に「マホー州デファイヤンス校」に学んだ。そこを優等の成績で卒業し、賞与の金時計と共にバチェラー、オブ、アーツ(Bachelor of Arts 文学士)の称号を得た。それは、明治四十年三月十日の大阪朝日新聞の人物畫傳(五十五)▲北村透谷の未亡人美那子女史▼という潑刺としたミナの写真入りの記事になっている。苦学成業の後、明治四十年一月三十日に帰国したミナは満四十一歳。渡米当時六歳だった英子は十四歳の少女に成長していた。

帰国後ミナ英子の母子二人きりの生活がはじまるのである。そしてミナは官立豊島師範学校の英語教師として出発した。小沢氏は、  
当時は、今に比べて女性の社会的な地位は低く、共立女学校や女子学院の英文科を出た位では教員になることはほとんど不可能に近かった。

(前出「北村美那の一生」)

と述べておられる。羽賀しげ子女史の「晩年の北村美那子と『透谷研究会』の参考資料①としてあげられている北村美那子略年表によると、それは明治四十年八月十五日の記述の次に日付なしで書かれていて、不明だったのだが、小沢氏によると「明治四十二年五月」(前出「北村美那の一生」とされ、手塚竜麿氏も「明治四十二年開校の豊島師範創設時」(『自治・その折り折り』「男子校での女教師第一号北村美那」とされているので、ミナは明治四十二年開校の豊島師範学校で教師生活の第一歩を踏みだしたと考えていいかと思う。ミナは、公立男子校における女教師第一号であった。

ミナは明朗でさっぱりした性格の女性だった。

物言う度に美しい皓齒しろはのあらわれるのはこの妻君が持前の愛嬌である。

〔春〕二十六章

「ねえ、操、しばらく岸本君を吾宿うちしゆくに置いて上げようじゃないか。どうだね、お前の方の都合は」

「ええ、宜よろう御座んすとも」

(同 四十五章)

宮内亮子女史は、大久保龍氏の談話を「美那子は洋行帰りも手伝ってか、性格は明朗で自分の思うこと、語りたいたいと思うことを卒直に発表出来たし、敢えて人意を迎えることもなく、人意を害することもなかった。」「美那子はまた、とにかくスマートで、あかぬけした、そして親しみ深く且つ水ぎわ立っていた。」「学生間にも人气的であった様だ。」と引用しておられる。大久保龍氏は、当時の美那子の姿を、

五十年の追憶語るハイヒール

北村み奈子は眼鏡かけたり

リーダー手に袴さばきのハイヒール

男子師範に降りし一鶴

などと詠んでおられ、宮内亮子女史は、「誠にもって当時の美那子

の姿が目にかぶの念ひとしおであり、老眼鏡に袴さばきのハイヒール、美那子ならではの粹まことなありさまである。」と述べておられる。

そして大正十二年（一九三三）五月、十四年間勤めた豊島師範学校を退職し、六月一日から府立品川高等女学校（後に府立第八高等女学校と改名、戦後は都立八潮高校）に勤務することになった。ミナは「ときには教室でチヨークを生徒に投げつけるほどきびしい一面もあったが、同時に豊かな経験と広い教養をもって人生問題についても相談のつてくれるやさしい教育者でもあった。」（前出「北村美那の一生」）

昭和十二年（一九三七）一月、ミナはバスで通勤の帰り、降りる際に怪我をしたのが原因で、十四年間勤めた第八高等女学校を退職した。満七十一歳であった。

ミナは「未亡人の救済といふのも、つまるところは女子教育の根本にあるものだ」（前出「誘惑と戦つて廿餘年の獨身生活」という考えから「女學校を起したい精神」（前出「大阪朝日新聞」）で帰国したが「時代状況が、きびしすぎた」理由からか、断念したようである。未亡人の生活はミナもいっているように「容易なこと」ではない。ミナ自身、持ち前の負けじ魂と自立心からようやく立ち直り見事留学を果たして生計を立て、英子を嫁がせたのだから。ミナが世の未亡人に、「まだ若くて、相當の配偶者が見つかり、相當な人が媒介なかわととなつてならば、再婚することは寧ろ結構なことだと思ひます。」（前出「誘惑と戦つて廿餘年の獨身生活」と再婚を奨めていたのもうなずける。ミナは当時言われていたような「二夫に見えず」という頑まことな考えを持っていなかっただろう。各未亡人に対して思いやりの心を持っていたことも察せられるのである。ミ

ナ自身、独身生活で戦いながら、再婚しなかったことに対して後悔じみた気持ちになったのも不自然ではないと思われる。小沢氏は次のように述べておられる。

透谷が明治絶対主義国家体制とのたたかひにおける戦死者であるならば、彼女は女性であることによつて二重の苦難の道を歩み、虚無と怒りを胸の奥に秘めて生きてきたのである。

(前出「北村美那の一生」)

晩年ねたり起きたりの生活をしていたミナはある日、英子に「ワタクシユルシテクレマスカ」とたずねたという。「お母さん、母娘の間柄で、なにが許すも許さなありませんか？」との英子の言葉を聞いて安心したのか、その後数日にしてミナはこの世を去つたのである。(前出「北村美那子論——透谷の死後——」)

英子の嫁いだ堀越家で、昭和十七年四月十日、満七十六歳五カ月の波瀾にみちたその生涯を閉じたのである。

ミナの一生をたどつて、透谷を背に負うて生きたことが強く感じられた。一生独身を通したことも、単身渡米留学したことも、帰国後、英語教師として教育に尽くしたこともそのあらわれではないだろうか。ミナの心の中に「透谷の期待にそいたい」ということがどこかにあったにちがいない。透谷死後、傷心のミナは孤独の中ではつきりと「詩人の妻なるよ」という「透谷の声」を聞いたのかもしれない。一人になって「今までの生活は何だったのか、これから私はどうしたらいいのか」と自問自答の毎日だっただろうと思う。夫透谷を助け、家事をこなし、子を育てる——その努力は並たいてい

のものではなかつただろう。透谷の「記憶せよ、きみ今は病苦の人の妻なるを。」という言葉が思い出される。「しつかりしろノ」という透谷の叱咤激励の言葉をミナは何度も何度も思い出したにちがいない。

## 五、意志の人

「ああ、お前も敗北者なら、俺も敗北者だ——どうだね、いっそ俺と一緒に……」

操は呆れて夫の顔を眺めた。暫時の間、彼女は物も言えなかつた。「まあ、貴方はどうかなすつたんじゃ有りませんか」と彼女の眼が言った。

「私は厭です」と操は力を入れて暫時考えた後で言った。「子供がありますから、私は厭です」

「子供がなけりゃ？」と青木が反問した。「子供さえなけりゃ、そりゃもう、どんなに成つたつて関つかいませんけれど——」

こう操は答えたものの、何となく可いか恐しいところへ無理に一緒に引入られるような気がした。「父さん、父さん、これほど私は貴方の為に苦勞しているじゃ有りませんか、何もかも犠牲にして貴方の言葉に随したがっているじゃ有りませんか——まだそれでも足りないんですか」こう操は腹の中で言ったのである。

「ははははは」

青木は笑に紛らして了つた。

(『春』六十四章)

私も「春」にありましたやうに一緒に死にたかつたのです



が、一方には子供に對する未練がありまして、どうか少しは人並になれるまでもと、それが心に残ったものですから、つひ今日までもかうして居るのです。詩人の妻なんと云ふ者はどうしても尋常の覺悟ではいけないやうに思ひます。

(前出「春」と透谷)

追いつめられた透谷の心理状態がうかがえるとともにミナの姿も眼に浮かぶ。透谷はミナに心中を迫っているが、ミナは同意しなかつた。英子がいるからである。ミナは理性の強い女性だった。あきらめずに精一杯生きようとしたのである。「尋常の覺悟」ではなかつたとしても、妻としての立場と母親としての立場の間でさぞつらい思いをしただろう。

透谷の自殺の原因は「貧苦」と「病苦」ではなかつたかと想像されてゐる。「精神分裂病質」だったという見解があるが、『座談会 明治文学史』ミナに心中を断られてもしつこく迫ってついに無理心中をしたというわけではないから、気持ちがいになつてしまつたのだとは思えない。透谷はずつと正気であり続けたのだ。私は透谷を死ぬ瞬間まで理性をもち続けた意志の人だったと考えている。ミナもまた、「借老同穴」の望みは達せられなかつたが、透谷の期待を、その死後において見事に実現してみせたという点で、透谷と同じく意志の人であつたと言えよう。

鶴子は母の傍に据えられて、おとなしく遊んでいた。漸く独りて歩く位の年頃で、父の亡くなったことも知らずにいるらしい。その無邪氣な、愛らしい顔付が、一層人々にあわれを催さ

せた。

「父さん、ねんね」

こう鶴子は片言まじりに言つていた。

(「春」八十五章)

おわりに

「好き」という感情は理屈では説明しきれないものだとあらためて感じた。私の学生生活の中で「透谷」との出会いには最も大きな収穫だつたと思う。夢の中に透谷があらわれたこともあり、ねてもさめても透谷の顔が頭から離れない時期もあつた。藤村や山路愛山の言う「眼元涼しく声の涼しい人」とは——などと考えはじめると明治時代にタイム・トリップしたくなつたほどの熱の入れようで、我ながらあきれた。

こうして、何とか無事に論文を仕上げることができてとてもうれしい。大きな責任を果たしたという気持ちと、少しばかりの寂しさがまじりあつて複雑であるけれども。この論文を書き上げるまでは、透谷の魅力を文章化しない安心感みたいなものがあつた。それは透谷を正式に論じるということに不安を抱いていたからかもしれない。

全力を尽くしたつもりであるが、まだまだ未消化の部分の多い論文である。この論文でまともきれなかつた問題については、これからも私なりに考えていきたい。

透谷とはこれからもずつとつきあつていきたい。——たとえ消化不良を起こしながらでも。

彼は非常に速筆であった。行動的にもなかなか働き者であった。今日であつたら原稿料だけでも相当な額に達して、むしろ生活力の強い文学者のタイプに属するのであつたが、彼が生活に恵まれなかつたのは時代の罪だったのである。

(前出『近代文学ノート2』『北村透谷』)

と勝木氏が述べておられるように、私も「透谷は決して『実行力・生活力のない、いわゆる文学青年型の人間』ではない」ということを強調しておきたいと思う。

最後に、この論文をまとめるにあたり、貴重な資料や文献をかして下さり、暖かく御指導して下さいました天野茂先生に心から御礼申し上げます。

### 参 考 文 献

- 『北村透谷・山路愛山集 現代日本文学大系6』 筑摩書房
- 『透谷全集』全三巻 編纂・校訂・解題 勝本清一郎 岩波書店
- 『近代文学ノート』1・2 勝本清一郎 みすず書房
- 『『文学界』とその時代 上』 笹淵 友一 明治書院
- 『北村透谷』 笹淵 友一 福村書店
- 『北村透谷』 阪本 越郎 弘文堂
- 『北村透谷 近代日本詩人選 1』 桶谷 秀昭 筑摩書房
- 『北村透谷研究』 平岡 敏夫 有精堂
- 『北村透谷』 舟橋 聖一 中央公論社
- 『日本近代青春史』 神崎 清 書物展望社

『北村透谷 原像と水脈』 小沢 勝美 勁草書房

『北村透谷小伝——詩人の運命』(『人生に相渉る』とは何の謂ぞ) 桶谷秀昭編 旺文社

『座談会 明治文学史』

柳田 泉・勝本清一郎・猪野謙二編 岩波書店

『黙移 明治・大正文学史回想』

相馬 黒光 法政大学出版社

『新編明治精神史』

色川 大吉 中央公論社

『春』 新潮文庫

島崎 藤村 新潮社

『桜の実の熟する時』 講談社文庫

島崎 藤村 講談社

『近代日本恋愛史』

石垣 綾子 角川書店

『恋愛 私のアンソロジー 1』 編集・解説 松田 道雄 筑摩書房

『恋愛——北村透谷と『恋愛』の宿命』 柳父 章 岩波書店

『恋が試練であった時代』(『歴史と人物』昭和55年4月号特集 近代恋愛事件秘話)

澤地 久枝 中央公論社

『近代恋愛物語50』(別冊太陽)

瀬戸内晴美選 平凡社

『明治女性史 下巻 愛と解放の胎動』

村上 信彦 理論社

『現代のエスプリ 恋愛論』

編集・解説 勝部 真長・長谷川鏞平 至 文章  
『現代のエスプリ 結婚とは何か』

編集・解説 勝部 真長・長谷川鏞平 至 文章  
『人物畫傳 (五十五)』

▲北村透谷氏の未亡人美那子女史▼』

明治四十年三月十日 大阪朝日新聞

北村ミナ自筆履歴書

『北村美那子論——透谷の死後——』

宮内 亮子

『晩年の北村美那子と『透谷研究会』』

羽賀しげ子

『町田近代百年史』

町田ジャーナル社

『誘惑と戦つて廿餘年の獨身生活』

(『女の世界』第7巻第2号)

北村美那子 實業之世界社

『男子校での女教師第一号 北村美那』

『自治・その折り折り』

手塚 竜磨 公人社

『十一面觀音の旅』

——あるいはエロスについて——

『歩きながら考える』

矢内原伊作 みすず書房

〔評〕

勝本清一郎氏が、「理想主義を説きながら同時にリアルでもある」とされた、そのリアルな側面にも注目しながら、透谷の恋愛・結婚・女性観を考察したものである。河野さんに、「咲いたまま折れた百合」によりも、「折れたまま咲いた百合」に透谷を見る透谷観のあることが、論旨を、情熱的な、光ったものとしている。終始女性

ミナ子に温かい眼が注がれているが、それが透谷死後のミナ子におよび、その半生を、透谷を背負い、透谷の期待にそうべく自立したものであったと結論するところには、鮮やかな女性の視点がある。透谷との出会いを大事に活かしてゆかれることを祈る。

(天野 茂)

## 国文学会 消息

。昭和四十一年開学以来、国文演習三・国文講読三を担当されていた天野茂先生が、昭和五十八年三月三十一日付をもって本学を退職された。

なお、天野茂先生には昭和五十八年四月一日付をもって、兼任講師として再び国文演習三・国文講読三を担当して頂けることとなった。

。副手尾谷涼美氏・井原浩美氏の御結婚退職にともない、昭和五十八年四月一日付をもって本学本年度卒業生瀬尾幸恵氏・村濱富子氏をお迎えすることとなった。

なお、尾谷涼美氏は昭和五十八年八月十九日女子を無事出産された。

。本学事務室助手武田ゆりこ氏は御家庭の事情により、昭和五十八年三月三十一日付をもって本学を退職された。

。本学事務室受付に、昭和五十八年四月一日付をもって本学本年度卒業生竹迫晴絵氏をお迎えすることとなった。

。本学事務室教務課に、昭和五十八年四月一日付をもって本学本年度卒業生西岡浩美をお迎えすることとなった。